

第62回日本生物工学会大会

10月27～29日に宮崎市で開催

第62回日本生物工学会大会(宮崎大会)が10月27～29日の3日間、宮崎市のワールド・コンベンションセンター・サミットで開かれる。

663題の一般講演(ポスター形式)と16のシンポジウムが行われ、民間企業のアピールの場として12のランチョンセミナーも設けた。シンポジウムの内容は次の通り(カッコ内はオーガナイザーの所属機関)。

【本部企画シンポジウム】

▷「酒類の香気成分研究の新展開—お酒の香りの基礎から最

新研究まで—(酒総研、月桂冠、サントリー)▷「学発技術シーズ発表会—物質生産、装置、分析・周辺機器に関するシーズ提案」(アステラス製薬、味の素、鳥居薬品)▷「醗酵工業とものづくりの最前線」(丸菱バイオエンジ、タイテック、名古屋大)

【一般公募シンポジウム】

▷「生理活性ペプチド研究最前線」(宮崎大)▷「食の機能・安全を科学する—おいしさから生理活性、安全性の評価まで—」(大阪大、宮崎大)▷「ア



昨年、名古屋大学で開かれた第61回大会

カデミズム研究と産業の間—気安く実用化と言わないで—」(宮崎大、つくば環境微研)▷「物質生産ツールとしての微細藻—電子志向型バイオテクノロジー(e-バイオ)を起点とする藻類工学の夜明け—」(東京大、宮崎大)▷「伝統的発酵微

生物の新しい利用展開」(琉球大、山口大)▷「D-アミノ酸研究の最前線—その新しい生物機能と代謝—」(九州大、名古屋大)▷「生物学教育—高等教育の実質化は大丈夫か—」(九州工業大、信州大、長浜バイオ大、東北大、大阪大)▷「ナノバイオテクノロジーによる環境への新アプローチ」(名古屋工業大、九州大)▷「産業酵母の育種技術の現状と展望—有用機能の向上をめざした多面的アプローチ—」(奈良先端大、京都大)▷「ゲノム基盤にもとづく合成ゲノム生物学への新展開」(慶応大、信州大)▷「1分子1細胞アッセイ技術に

バイオ最前線

④

基づく生物学の最近の潮流」(名古屋大、大阪府立大、神戸大)▷「動物細胞培養で求められる安心・安全—見直される水産品—」(福井大、北海道大)▷「植物遺伝子の魅力—生物学分野への応用」(大阪大、東北大、信州大)。

編集協力：日本生物工学会
www.sbj.or.jp

今回は10月20日に掲載